

潜伏キリシタン集落の歴史的背景を考えてみましょう(その1)

- 外海^{そとめ}の潜伏キリシタン -

この世界文化遺産は12の構成資産から成り立っていますが、うち6つが外海地区と五島列島にあります。江戸時代は、いずれも信仰組織がある潜伏キリシタン集落でした。初めになぜ潜伏した(できた)のかをご説明しましょう。

1614年、徳川政権はキリスト教の教えが幕府の政治支配と適合しないとして全国に禁教令を発令しました。「日本にては長崎がローマなり」と言われていた長崎の教会も多くが破壊され、以後キリシタン住民への弾圧が続きました。隣接した大村藩では、それより前の1606年大村純忠の子・喜前^{よしあき}のときイエズス会の宣教師を藩内から追放し、大村城下及び大村湾周囲の領民に対し禁教策を徹底しましたが、山を越えて角力灘^{すもう}に面した地域、雪ノ浦・神浦村あたりから三重村周辺にかけては徹底できなかったようです。

その外海地区は全体山がちな地形で、まとまった田んぼ・畑は限られています。それでも水はけがよい斜面地には甘藷^{かんしょ}(サツマイモ)が植えられ、生きていくうえで最も大切な食糧となりました。サツマイモというと、普通薩摩藩が琉球から取り入れた皮が赤いリュウキュウ芋のことですが、当時大村藩で作られていた甘藷は皮が白いヒゼン芋でした。ちょっとベチャとした感じで、子供のころの私が食べておいしいという思い出はありません。(現在は品種改良されて美味しくなっていますが)。

少し横道にそれます。享保の飢饉のとき幕府は、餓死者を出さなかった大村藩と薩摩藩に甘藷の提供を指示しました。青木昆陽らが検討した結果、薩摩藩のサツマイモが採用され、以後全国に栽培が広がりました。昆陽を甘藷先生と言うのはそのためです。それより早い対馬^{たいま}の孝行芋栽培について興味ある人は調べてみてください。

当時は幕府のキリシタン宗門対策として、人々はどこかのお寺の檀家^{だんか}になる必要がありました。外海地区では潜伏している村民も含めて浄土真宗門徒が多かったようです。キリシタン宗門と浄土真宗(一向宗)門徒、どちらの教えでも墮胎^{だたい}を禁じています。

【長崎県長崎学アドバイザー 本馬 貞夫】



出津集落（中央左手に出津教会）



出津集落に伝わっていた大天使
ミカエル『日本初期洋画の研究』より